

# 第四回 環境思想シンポジウム報告

山田悠介

長野県小諸市にある安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターでは、毎年春に「環境思想シンポジウム」と呼ばれるシンポジウムが開催されている。第四回目となる2014年のシンポジウムでは、人文科学／社会科学という枠を超え、場所、命と食、異文化理解といった多様な視点から「環境」をめぐる議論が交わされた。その様子を以下にご報告したい。

2014年3月18日、長野県小諸市にある安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターにて、第四回環境思想シンポジウムが開催された。環境倫理学、環境社会学、環境文学、環境教育などさまざまな分野で「環境」を専門とする識者が集い、人間と自然環境との関係性や、環境思想の過去、現在、未来についてそれぞれの立場から議論を交わす本シンポジウムも今年で四回目を数える。平日にもかかわらず40名を超す参加者が集まったカンファレンスルームは、ほぼ満席状態だった。午前9時、部屋の中央部に口の字に並べられた机に基調講演者とパネリストが、そして、パネリストを囲むように聴衆が着席し、センター長の岡島成行氏（大妻女子大学）のご挨拶でシンポジウムが開始された。

最初の講演は、山里勝己氏（琉球大学名誉教授）による「ゲーリー・スナイダーの環境思想：日本との関連で」。まず、前方のスライドに映し出された19世紀の画家ジョン・ガストのAmerican Progressという絵画を分析しながら、アメリカ建国の歴史がヨーロッパから渡ってきた人びとが先住民や野生動物を西へ西へと追いやっていった歴史でもあることが解きほぐされていった。そして、移住は場所の獲得だけでなく、場所の喪失ももたらすという観点から、沖縄の歴史や、3.11以降漂流することを余儀なくされた福島の人びとにも言及し、移住すること／させられることが人や場所にいかに大きな影響をもたらすかが示された。

続いて、移動の文化をその根底に持つアメリカのなかで、人と場所との繋がりに目を向けたゲーリー・スナイダーの環境思想へと話が展開していく。青年時代のウィルダネスとの接触、京都相国寺で日本文化を学ぶ日々、シエラネバダへの定住といった数々のターニングポイントと併せてその詩を読み解きながら、スナイダーがソロ流のアーキズムの伝統と東洋思想をミックスさせることによって西洋文化・文明の在り方に疑問を投げかけ、表舞台から排除されてきた先住民文化や野生動物からのまなごしを復権させようとしてきた軌跡が語られた。質疑応答では、定住は場所とのつながりを構築することもできるが、その一方で、災害が起こるような場所にしか生活ができない人が存在するということや、移動によって災害を回避するという志向性もあることなど、定住によって「不幸」が生み出される場合もあることが指摘された。その他、自然との関係だけでなく、人と人とのつながりやコミュニティも考慮に入



「環境思想シンポジウム」会場風景  
(写真提供：安藤百福センター及び野田研一／以下同)

れたうえで、移動と定住の問題について考察することがいかに重要であるかなど、多彩なトピックについて議論された。

次に、歴史学、環境史、災害史などを専門とし、日本だけでなく東アジアにも研究の射程を広げている北條勝貴氏（上智大学）が講演をされた。タイトルは、「〈串刺し〉考——〈残酷さ〉の歴史的構築過程——」。日本の古代から中世にかけてのさまざまな文献に描かれた動物の串刺しや殺生にまつわる物語を読み解きながら、串刺しを「残酷な行為」と解釈することが、歴史的に構築されたものであることが明らかにされていった。たとえ生理的に嫌悪感を覚えるような行為や事象であっても、それをどのように解釈するかは、当然のことながら時代や文化によって異なる。串刺しの意味を歴史的に追ってゆくことで、仏教などの要因によってこの行為のもっていた多様な意味が削ぎ落とされ、変容させられていく過程が浮き彫りにされていった。と同時に、「存在論」に立脚して問題の解決を図ろうとする立場のもつ危うさも検討に付され、世界が文化的「構築物」であるという認識こそが、世界の捉え方の多様性を認め、自分たちの文化や価値観が普遍的で唯一「正しい」ものではないという思考を可能にすることが強調されていた。質疑応答では、安易に「文化相対主義」を持ち出すことで思考停止に陥ってしまう危険性や、人文学的なアプローチで解明されたことと自然科学的なアプローチで解明されたことはいかに結び結ぶことができるのか、といった非常に大きな問題が俎上に載せられ、活発に意見が交換された。

昼の休憩をはさんで、午後の部へ。午後の部の司会は鬼

頭秀一氏（東京大学）、講演者は結城正美氏（金沢大学）と福永真弓氏（大阪府立大学）。エコクリティシズムを専門とし、文学における食の問題を研究テーマとする結城氏を取り上げたのは、汚染された食べ物を食べるという行為である。結城氏はまず、石牟礼道子の『苦海浄土——わが水俣病』に、汚染されていることを分かった上で海の幸を口にすると人の姿が描かれていること、また、水俣の多くの漁民たちが汚染されたことを認識しておお土地の魚介を食べ続けていたことを指摘された。石牟礼の作品だけでなく、加藤幸子や田口ランディの文学にも描かれる、リスクがあると分かっているながら食べるという行為をいかに考えてゆることができるのかという問題提起は、活発な議論を呼んだ。ディスカッションでは、漁師としてのアイデンティティや、生きる場所との緊密な関係性、食べ物を「授かり物」と捉えるメンタリティなどに注目し、科学的な言説（リスク／安全）とは異なる視点から食の問題を考える必要性が検討された。

福永氏は、先住民居住地の剥奪や自然資源利用の制限など、場所と場所を奪われた人びとの問題をテーマに発表された。先住民やマイノリティに対する抑圧の問題などを扱う「環境正義」という発想が社会運動から生まれてきたという歴史的な流れを概観した上で、「環境正義（environmental justice）」と、「生態系に対する正義（ecological justice）」が対立関係にあるという状況を非常に明快に整理された。そして、福島や沖縄などに代表されるような、さまざまな負担を負わされている地理的空間が存在するという、さらに、そうした事実が社会的に隠蔽されているという問題点を指摘し、それらを可視化させることや、こうした事態がどのような社会空間で生み出されてしまっているのかを把握することの重要性を強調された。最後に、そうした問題に対し、互いに抱き合えることができる部分が異なる人文科学と社会科学が相補的にアプローチすることによって、実り多い議論が可能となることを示唆し、シンポジウムは幕を閉じた。

場所をめぐる問題、命と食をめぐる問題、そして、異文化理解をめぐる問題。まるで示し合わせたかのように相互に関連するテーマについて論じられた各講演者のご発表や



安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター外観



センター長岡島成行氏挨拶



研究報告の様子

パネリストとのディスカッション、そしてフロアーも交えた質疑応答から私が痛感させられたこと。それは、今では見えなくなってしまっていること、あるいは、「見えているのに見ていないもの」（鷲田清一『〈想像〉のレッスン』）があることを認識し、それらを可視化していこうとする試みのもつ重要性であった。その場所がどのような来歴を秘めているのか、その「来歴」がどのように構築されてきたものなのかを問うこと。一つの行為や出来事には、解釈の可能性が無限にあることを常に忘れず、自分にとっては理解できない〈ふるまい〉に込められた「意味」を実証的に付度すること。大きな声にかき消されそうな声に耳をすまし、見えないように仕向けられたことから目を背けないこと。分からないこと、分かりえないことを認め、それでも関わり続けようとする。筆者の力が及ばず、本稿ではこうした志向性に貫かれた今回のシンポジウムで展開されたさまざまな議論のごく一部しかお伝えすることができなかったが、環境思想をめぐる濃密なやりとりにご興味を持たれた方は、ぜひ次回の環境思想シンポジウムに足をお運びいただきたいと思う。

山田悠介（やまだ・ゆうすけ）1984年、埼玉県出身。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士課程後期課程在学。主な論文に「動物変身譚における反復と類像性」（『文学と環境』第15号、ASLE-Japan／文学・環境学会）ほか。